

『源氏物語』本文研究の新しい時代

伊藤鉄也

総合研究大学院大学教授 日本文学研究専攻／人間文化研究機構 国文学研究資料館教授

『源氏物語』は書き写されて伝承されてきました。そのため、さまざまな写本が存在します。現在、私は膨大な写本の本文をデータベース化し、各種の本文を比較しながら、その諸相を読み解こうとしています。この基礎的な研究の蓄積があって、次代の『源氏物語』本文研究が花開くことになるのです。

国文学研究資料館の「源氏物語展」

国文学研究資料館は、2008（平成20）年4月に都内品川区から立川市へ移転しました。それを記念して、特別展「源氏物語 千年のかがやき」を10月に開催しました。折から、『源氏物語』が記録の上で確認されて千年目ということもあり、約1ヵ月間の源氏展の来場者は4069名という、予想以上の方々に見ていただくことができました。

アンケートでは、「国内にこんな専門機関があることを知らなかった」ということに始まり、展示資料については「貴重なものが勢揃いで圧巻」「解説が体系的でわかりやすい」等の意見が寄せられました。その中でも、次の感想は、展示を担

当した者としてはうれしい反応でした。

- ・「写本」「古筆」「仮名文字」の墨の色が黒々として見られるものがあった。
- ・書写途中の展示品があり、コピーや印刷のない時代の苦勞がより一層実感できた。

今日、『源氏物語』は市販されている活字本で読まれています、活字本が普及したのは明治・大正期になってからのことです。それ以前は人の手で書き写した写本が流布していました。『源氏物語』54巻一揃いに収められた文字数は約100万字の長編ですから、書写に要する時間と労力は並大抵ではなかったはず。現在、平安時代の本文はまったく残っていません。そのため、長年にわたって書写を繰り返していく間に、語句や文章の

異なるさまざまな写本が生まれました。

『源氏物語』の成立当初から、草稿本や改稿本、そして清書本などがあったようです。『紫式部日記』によると、藤原道長が持ち出して娘の妍子に与えた本があったとか。そうした複数の本文が写し伝えられたことが、この異本の発生の一因ともなっているのです。

そこで、より平安時代の物語本文に近いものを求めて、本文を見直しての校訂の努力も続けられてきたのです。

今日一般に流布する活字の校訂本（小学館の『新編日本古典文学全集』など）は、室町中期に書写された「大島本」と呼ばれる古写本を唯一の標準テキスト（底本）としたものです。しかし、この「大島本」にしても室町から江戸時代にかけて手が加えられた校訂本であり、平安時代の本文を復元しているわけではありません。したがって、「大島本」だけで『源氏物語』を読むというのは、古典を理解する上では問題があります。今回の源氏展では、このような問題意識に立って、鎌倉時代から伝え残されている古写本の実際を見ていただきました。写本がどのように伝えられてきたのかを知っていただき、『源氏物語』は一つではないことを再認識してほしい、という問題意識のもとに企画を進めました。

『源氏物語』のデータベース化

私の研究テーマは、『源氏物語』のさ

写真2 『源氏物語』団扇（うちわ）画帖 第5図「若紫」(1)（国文学研究資料館蔵）。団扇型の源氏絵54枚が貼られた手鑑帖で、江戸時代中期に土佐光則系の画家によって描かれたものと推定されている。北山を訪れた光源氏は、柴垣の間から、美しい少女（のちの紫の上）の姿に心を奪われる。その少女は、「雀の子を犬君（いぬぎ）が逃しつる」と言って泣きじゃくっているところだった。



まざまな本文を、可能なかぎり現代の文字表記に置き換えて（翻字）、その各々の本文の違いを整理し（校合）、それぞれの本文のありようを読み解くことです。そのために、現在確認できるすべての古写本をコンピューターに入力していく仕事を、もう20年以上も続けています。

今のところ、対象となっているのは、おおよそ30種類の古写本のセットです。コンピューターで読み書きできるテキストデータに統一し、検索ができるデータベースにしています。墨で書かれた文字は、誤字・脱字はもとより、どのようでも読める字体があります。異体字などの外字処理が必要な場合は、通常使われている文字に置き換えたりしています。この問題は、いずれ画像データベースが構築されれば、より詳しい文字や文字列が確認され、正確な読みが明らかになるものと期待しています。今は、一つでも多くの写本の内容が確認でき、検索できるデータバンクを作ることを優先しています。研究環境の基盤を整備することが大切だからです。

こうした取り組みの成果は、『源氏物語別本集成 全15巻』（伊井春樹・伊藤鉄也・

小林茂美編、平成元～14年、おうふう）と、『源氏物語別本集成 続 全15巻』（同、平成17年以降刊行中）で公開しています。第1期にあたる『源氏物語別本集成』では、約3億字が確認されました。第2期の『源氏物語別本集成 続』では、約7億字が確認されるはず。『正・続』を合わせると、古写本に書写された約10億文字を確認したことになります。

『源氏物語』の古写本を調べるということ

ここで、『源氏物語』の写本について説明しましょう。鎌倉時代には、大きく二つに分かれていたことが記録に残っています。一つは、歌人として知られる藤原定家が校訂を行い藍色の表紙をつけたことから「青表紙本」と呼ばれてきたものです。もう一つは河内守だった源光行・親行の親子が校訂した「河内本」です。この2つの流れに入らない本文も多数流布していました。今日のすべての活字本の底本となっている「大島本」は、いわゆる「青表紙本」の流れにあるものとされています。

近代になって、『源氏物語』の本文を体系的に整理した池田亀鑑は、「青表紙

本」と「河内本」、そしてそれ以外を「別本」に分類しました。2つの系統と、それ以外という、『源氏物語』の本文を3つに分類したのです。これら主要伝本の本文の違いをまとめた校本が、1942（昭和17）年に刊行された『校異源氏物語』です。この『校異源氏物語』（中央公論社）で、「大島本」が初めて本文校合の底本として、基準本文の位置を獲得しました。その後、1953（昭和28）年に索引篇と資料篇を加えた『源氏物語大成』となり、現在に至るまで『源氏物語』を研究する上での基本資料となっています。

ただし、これには前史があります。1932（昭和7）年段階の『校異源氏物語』の稿本では、何と「河内本」が底本となっていたのです。それが、驚いたことに、その10年後には、佐渡で見つかったばかりの「大島本」に底本が一大変更されたのです。これは想像を絶するもので、実態もよくわかっていません。以来、私たちはこの「大島本」で『源氏物語』を読むことになりました。これが、いわば「大島本信仰」の始まりです。

現在、京都文化博物館に寄託されている古代学協会所蔵の『源氏物語 大島本』



写真1 国文学研究資料館では2008年10月、特別展「源氏物語 千年のかがやき」を開催した。鎌倉時代から江戸時代に作成された写本や、物語の名場面を描いた源氏絵、注釈書、また各国語への翻訳書などが展示され、多くの見学者が訪れた。

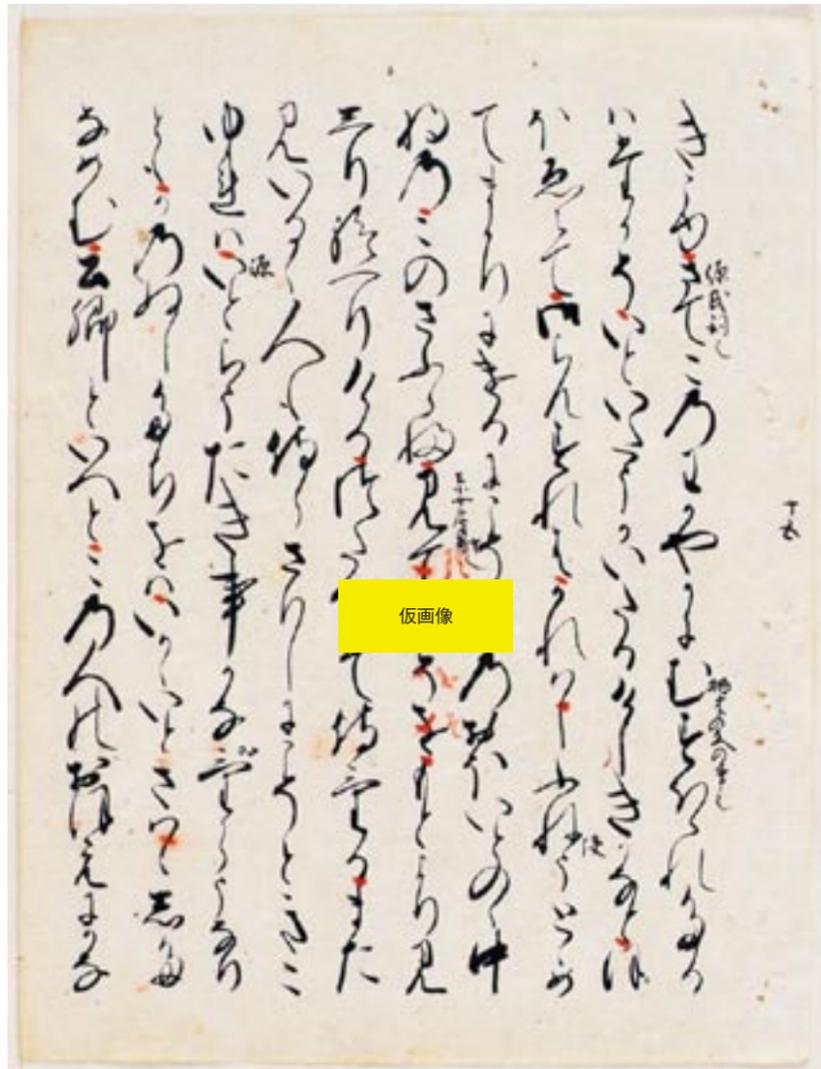


写真3 大島本『源氏物語』第24巻「胡蝶」15丁表(古代学協会蔵)。5行目の「てこそを」に朱のミセケチと傍記がある。現在流布する活字校訂本は、この朱の補正を採用して、「みるこそぞ」とする。「みるこ」は玉蔓(たまかづら)付きの童女の名前とされる。

の調査をしています。拡大鏡や顕微鏡付きのデジタルカメラなどを駆使して、原本に書かれている文字の状態を精査しています。目を懲らして「大島本」を見てみると、今読まれている『源氏物語』の本文について、改めて疑問が生まれます。書写された文字に対して、墨や朱による膨大な修正加筆の跡があるからです。そして、今は修正後の、それも江戸時代になされた補訂の跡をたどって作成した本文を、活字の校訂本としています。我々は、いったい何を読んでいるのだろうか、という疑問が生まれる所以です。

では、現在広く読まれている『新編日

本古典文学全集 全6巻』(小学館)の『源氏物語』の本文は、今後はどのように位置づけられるのでしょうか。これからの研究史の中では、江戸時代から明治時代にかけて読まれた注釈書『湖月抄』のような評価がなされるのでは、と私は思っています。

ところで、池田亀鑑が最初の校本において底本にしたと思われる〈河内本〉は、天理大学附属天理図書館に所蔵されているものらしく、この調査も行っています。現在刊行中の『源氏物語別本集成 続』では、この天理図書館の〈河内本〉の本文を翻刻して、他の本文と比較でき

るようにしています。そのためには一文字ずつ読み解いていくのですが、この本は、非常に読みにくい、というよりも癖のある文字で書かれているので、読み解くには馴れが必要です。とにかく、コツコツと作業を進める以外には方法がないのです。こうしたことは、文学の研究の中では、あまり好まれません。若い人には敬遠されがちですが、墨で書かれた文字には何ともいえない奥深い魅力があります。こうした翻刻作業は、1人でも多くの若手研究者に参加していただきたいと願っています。

文節単位で本文データを管理

『源氏物語別本集成 正・続』では、諸本校合の底本として鎌倉中期の写本である「陽明文庫本」を用いています。それは、平安時代に存在した『源氏物語』の本文の一つを、この本が伝流させている可能性があると思われるからです。現在盛んに読まれている「大島本」を、相対化するのにふさわしい、興味深い異文を多く伝える古写本群です。

翻刻本文のデータベースでは、文節単位に10桁(6桁+「-」+枝番号3桁)の通し番号を付して管理しています。第12巻「須磨」の例で説明しましょう。

例示する19種類の本文の校合結果を示すにあたって、次の方針を設けました。第4270文節目の「はつかし」は、「陽明文庫本」ほか6本に伝えられている語句です。そこで、同じ本文を持つ写本名は、大括弧で囲み[陽ハ尾高天平]のように示しています(陽は「陽明文庫本」の略で、ハ、尾、高、天、平も同様に略号)。これに対して「大島本」をはじめとする、それ以外の写本には、ここにまったく違うことば、「ひとりこち給て」が加わっています。

現在の流布本である『新編日本古典文学全集 源氏物語(2)』(209頁)では、次のように校訂されています。この前後の和歌と文章を引きます。

いつかたの雲路にわれもまよひなむ月の
見るらむこともはづかし

とひとりごちたまひて、例のまどろまれ

ぬ暁の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

校合資料である19種類の本文では、以下のように語句の加除が確認できます。

はつかし」[陽ハ尾高天平] ……
124270-000

はつかし」とひとりこちたち給て/たち
<削>[大]

はつかし」とひとりこち給て〔御穂妻阿
国日保前〕

はつかし」とひとりこちたまひて〔三〕

はつかし」とひとりこちたまて〔池伏〕

はつかし」とひとりこち給ひて〔肖〕

文節番号の「4270」の前の「12」は第12巻「須磨」をあらわします。ハイフン(-)に続く3桁の数字「000」は枝番号で、底本の「陽明文庫本」に対応する異文を示しています。「124270」における「大島本」を見ると、「陽明文庫本」の1文節の本文「はつかし(-000)」に対して、「大島本」では「はつかしと(-000)/ひとりこちたち(たち削)(-001)/給て(-002)」と、3文節になっていることがわかります。

まずは、こうした『源氏物語』の本文に関する基礎資料を作ることが急務です。それをデータベース化して次の世代

に伝えていくことが、本文資料を踏まえた実証的な研究を進展させるためには、不可欠なことでしょう。新たな古写本が見つければ、文節単位のデータとして追加していけばいいのです。

本文の新たな分別法を提案

上記の例は、「はつかし」と「はつかしとひとりこち給て」という、2種類の本文が伝わっていることがわかるものです。池田亀鑑の物差しに合わせると、「はつかしとひとりこち給て」が〈青表紙本〉と〈別本〉になり、「はつかし」が〈河内本〉ということになります。

従来、〈河内本〉は説明的な本文に改変されていて、わかりやすいと言われてきました。しかし、そうではなく、ここにあげた例のように、言葉がないことで物語展開を促すこともあるのです。こうした本文の加除について、私は物語本文の成立時点にまで遡ってみることにしています。平安時代の作者レベルでの字句の加除が、こうしたところに反映していることはないでしょうか。異本や異文が、本文の書写過程を伝流させている可能性を考えています。

池田亀鑑の〈青表紙本〉という概念は、諸本を筆写された内容で分別する上

では、はなはだ曖昧なものです。池田自身、『源氏物語大成』の凡例で次のように述べています。

原稿作製ノ都合上、昭和十三年以後ノ発見ニ係ル諸本ハ割愛シタ。

1938(昭和13)年以降、多くの古写本が確認されています。上記の例で言えば、[ハ穂妻阿国日保前伏]の9本が、『源氏物語大成』には校合資料として用いられていません。かわりに、[横飯七]の3本が採択されています。校合本文が多くなるにしたがい、本文がさまざまに影響し合いながら伝えられて来たことがわかりました。そのため、池田が仕分けをした〈青表紙本〉と思われるものについて、その本文内容が詳細にわかるようになりました。比較検討する本文としての資料がたくさん見つかるにつれ、それらのいくつかは、しばしば〈別本群〉に含めざるをえない本文と認定すべきことに直面するのです。そこで私は、池田の分類による〈青表紙本〉のことを、〈いわゆる青表紙本〉とすることにしています。そして、この〈いわゆる青表紙本〉と、これまでに私案で〈別本群〉と称してきたものを併せて、これらを〈乙類〉と命名



写真4 河内本『源氏物語』第12巻「須磨」の巻頭見開き部分(天理大学附属天理図書館蔵)。

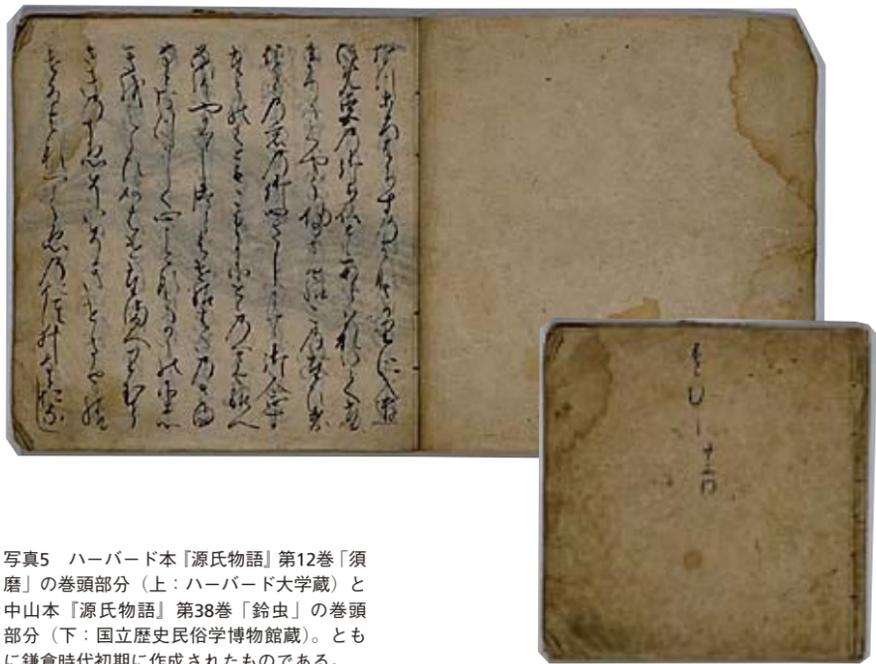


写真5 ハーバード本『源氏物語』第12巻「須磨」の巻頭部分（上：ハーバード大学蔵）と中山本『源氏物語』第38巻「鈴虫」の巻頭部分（下：国立歴史民俗学博物館蔵）。ともに鎌倉時代初期に作成されたものである。

するのが、2008年より新たに提唱している本文分別試案です。〈甲類〉は、私案だった〈河内本群〉の延長にあります。

つまり、池田亀鑑による『源氏物語』の本文の3分類〈青表紙本・河内本・別本〉を、今後私は〈甲類〉と〈乙類〉という概念で括りたいと思います。この本文分別試案を、現状における『源氏物語』の本文のありように当てはめて、今しばらくは対処していきたいと思っています。〈甲類〉と〈乙類〉という写本グループを示す名称は、これまでの池田亀鑑による分類を一度リセットするための、あくまでも暫定的なものです。今後の分別の進展によって、さらに的確な命名がで

いう基礎研究の大切さを、改めて問いかけるものとなりました。

しかし、そもそも〈別本〉とは何でしょうか。それが曖昧なままに、新聞記事がどんどん書かれています。池田が言った〈別本〉であれば、それは『源氏物語』の古写本の形態的特徴から分類されたときの「その他」の写本です。それを報道では、『源氏物語』の内容にまで敷衍して、平安時代の写本の解明に資するものという、拡大解釈によって認定した〈別本〉が見つかった、としています。伝えられてきた「物の形」で分類した物差しによって、その「物の内容」をも計る尺度にしようとしているのです。そもそも、計測する用途が違う物差しが、物語の本文を評価するときに使われています。こんなことがまかり通っていること自体が、『源氏物語』の本文研究がいかに遅れているのかを教えてください。

『源氏物語』の古写本や、ましてやその内容である本文が新聞等に報道されたのは、昨年が『源氏物語』の千年紀であったことに起因します。しかし、そればかりではないのです。これまで、我々が読むテキストが、「大島本一辺倒」であったことへの揺戻しが作用していると思われる。ここには、これまでに絶対視されていた写本「大島本」への信頼が揺らぎ出したことが伏流となっています。

『源氏物語』が「大島本」だけで受容されている研究状況に異議を唱え、『源氏物語別本集成 正・続』で具体的に検討する資料を提供しだして、やっと20年が過ぎました。そして、ようやく「大島本」の本文に対する疑問が、研究者によって議論されるようになりました。また、〈別本〉と言われるものの存在にも、目が向けられるようになってきたのです。この長い年月の本文研究の停滞を思うと、『源氏物語』の千年紀を契機としてその本文のことが話題になっただけで、これは一大進歩です。ここまで辿り着くのに、とにかく20数年を要したのです。資料が一つや二つ増えたからといって、軽々にその意義と見通しを口にするのは早過ぎます。あまりにも手元に情報がすくな過ぎ

るからです。

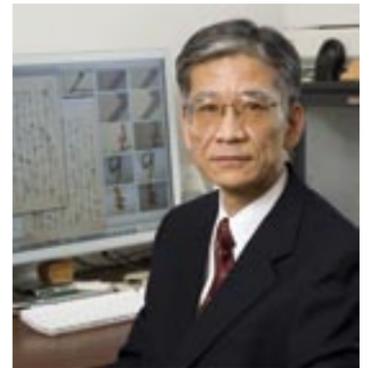
私は、『源氏物語別本集成』を作成している側にいるので、本文に関するデータは幾分多く持っている方だと思います。それでも、わからないことだらけです。なぜこんなに違う文章が伝流しているのか。いつも疑問を抱えながら、『源氏物語』諸本の本文に向き合っています。

次世代への期待

2008年は、『源氏物語』の千年紀という熱気の中で、さまざまなイベントが行われました。その中で、古写本の存在も大きくクローズアップされました。これまでは、『源氏物語』の本文というものはあまり見向きもされず、ひたすら活字による校訂本文で『源氏物語』は読まれていました。しかし、古写本に記されている本文の確認が70年以上も停滞した

ままであることが、ようやく話題として取り上げられる時代が来たのです。私にとっては、夢のような環境に身を置くこととなりました。今から30年前、『源氏物語』の本文の整理に着手したころには、本文に関する討論ができる日が来るのをひたすら待ち望んでいたものでした。それを思うと、「意外に早く来た」という印象を持っています。

予想外に早く『源氏物語』の本文に感心が集まるようになったのですから、後は若手がこうした問題に興味を持ち、育ってくれることを熱望しています。そのためにも、現在作成中の『源氏物語』の本文に関するデータベースを、一人でも多くの方々の協力を得て増補・改訂し、利用してもらえるように、日夜、研究環境の整備に取り組んでいるところです。



伊藤鉄也（いとう・てつや）
高校生の時に谷崎潤一郎の源氏訳を読んだから、源氏物語との付き合いが始まった。23年前に、コンピューターを活用した文学研究の入門書を書いて以来、源氏物語の写本とパソコンが研究に欠かせないものとなった。研究のかたわら、この数年は「賀茂街道から2」というブログで、源氏情報を発信するのが日課となっている。

むしめがねが必需品

大内英範

人間文化研究機構 国文学研究資料館機関研究員

昨年（2008年）は“源氏物語千年紀”として、さまざまな盛り上がりが見られました。中でも私にとって、写本の発見・確認についてのニュースは、どれも興味深いものばかりでした。「角屋本」(末摘花)の発見、長らく行方のわからなかった「大沢本」の出現、空蟬の一卷のみと思われていた「飯島本」(54)巻の確認など……。古い写本の存在が明らかになるたびに、そこにはどのような本文が書かれているのだろうかワクワクしてきます。

源氏物語に限ったことではありませんが、本文研究はまず写本の調査からはじまります。貴重な古写本の調査ですから、メジャーは金属製でないもの、メモは鉛筆を用いるなど、道具にも一定の注意が必要です。そのほかに必需品として、むしめがね(ルーペ)を忘れてはいけません。

たいていの写本で、文字が削られて消され、場合によってはほかの文字が上書きされている箇所が見られます。単純な書き間違いの訂正、他本との校合など、理由はいくつも考えられます。重要なことは、消された文字こそがその写本に記された第一段階の文字だということです。書写者によって最初に書かれた文字を読み取ることが、書本(親本)の本文を推定する重要な手がかりになるのです。

たとえば東洋大学附属図書館所蔵の「高木本」(伝阿仏尼筆)帯木



大内英範（おうち・ひでのり）

巻)も、削除痕の多くみられる写本でした。むしめがねを使って凝視していると……。削られた文字がだんだん見えてきました。それらをすべて記録して持ち帰り、他本の本文とつきあわせてみると、天理図書館所蔵の「池田本」の本文とほぼ一致することがわかったのです。すなわち「高木本」の親本の本文は、「池田本」の本文とほぼ同じ本文だったということになります。こうしたことから、「池田本」と「高木本」は、かなり近い世代で祖本を同じくする写本である蓋然性が極めて高いと認められます。同時に、両本の書写態度の信頼性をも証明するものです。むしめがねの威力で、思いがけない研究成果を得ることができました。

さあ、次はどんな写本と出会うことができるでしょうか。もちろん、むしめがねは忘れません。